

英語版「大和ことば」に由来する英単語の語源

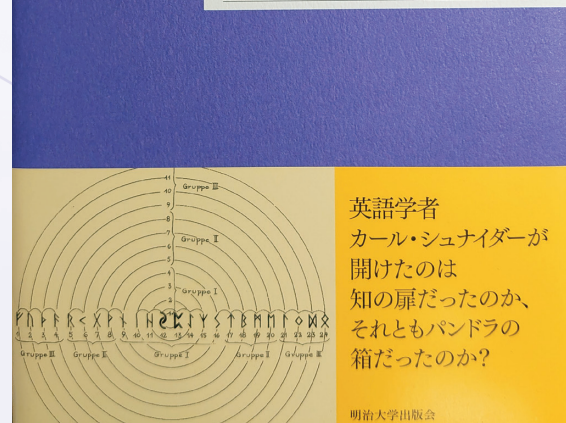
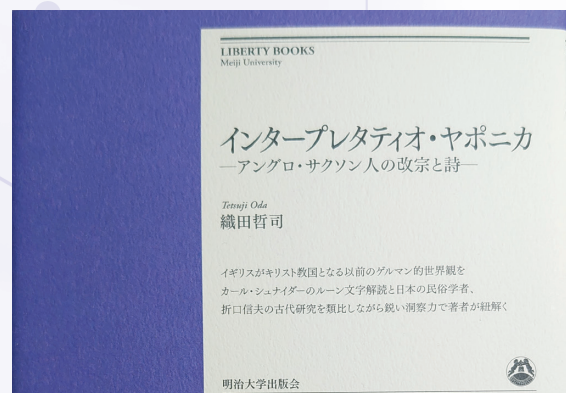
私の研究対象は、英語がゲルマン語から分かれてからさほど時間がたっていない時期のイギリスの言語と文化です。英語は北ドイツ沿岸やユトランド半島にかけての地域から5世紀半ばにブリテン島へやってきたゲルマン人侵入者たちによってもたらされた言語です。7世紀以降にキリスト教へ改宗してギリシャ語やラテン語によって表現される地中海の世界観に触れる前のゲルマン人（アングロ・サクソン人）が持っていた世界観をことばという窓からのぞいてみたいというのが主たる関心です。

ところで人体を構成する細胞の核の中にはDNAが生命の暗号を伝えているといえます。極小の世界に二重らせん構造をした宇宙が広がっているようで、なんとも不思議な話です。そして、実はこれと似たことが語源学によって明ら

かにされてきました。

英語の歴史のもっとも初めから存在している単語（それをここでは英語版「大和ことば」と呼びます）の語源を調べていくと、英単語の中にゲルマン人の神話に基づいた大きな精神の宇宙が広がっていることがわかります。それは、移りゆく四季の中で、ひたすらに五穀豊穡と子孫繁栄を祈り続けた人々の精神世界です。

日本人が桜を見て春の訪れを確信するように、冬が終わり葉叢（はむら）に新たな神が宿る頃、「父なる天」から「母なる大地」へと湿り気が滴り、萌え出た若芽を見てゲルマンの人々は春の到来を確信しました。Beowulfもともと葉叢（eage）を見た人々の春への「確信」を意味しました。そして人々はおまじないとともに秋の収穫へ向けて大地がその命をつつがなく成長させるの



『インタープレタティオ・ヤポニカーアングロ・サクソン人の改宗と詩一』（明治大学出版会、2021年）

英語学者
カール・シュナイダーが
開けたのは
知の扉だったのか、
それともパンドラの
箱だったのか？

明治大学出版会

古典語に由来する英単語の語源

書店の語学書コーナーには「英語の語源」をうたった本が数多く並べられています。もともと受験対策として語彙力を付けるために語源と関連付けて英単語を覚えることを目的とする本が多かったの

ですが、近頃では一般教養書としての語源本が目に見えます。

しかしこれらの書籍が扱うのは、英語の歴史のどこかの時点で古典語から英語へ入ってきた外来語ばかりです。例えばpandemicはギリシア語のpandemos「病気の大量流行」がラテン語を経由して英語に入ってきたもので、pan-（全て

の）+ demos（民衆）から成り立つ、というような単語の構成についての説明がなされるだけです。もちろん語源と関連付けて、democracy「民主主義」が同じギリシア語のdemos（民衆）をもとにつくられたと知れば、覚えやすくなるでしょう。

ところが、この種の語源知識の

弊害に気付く時があります。それは、英語という言葉そのものがギリシア語やラテン語に由来していると誤解している学生さんが少なくないことです。本当は、英語はドイツ語やオランダ語、北欧諸語などとともにゲルマン語という古い言語から分かれ出たものであるにもかかわらずです。

研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

農学部

英語の語源から見る古代ゲルマン人の「農学」



PROFILE

織田 哲司
ODA Tetsuji

農学部教授
専門：英語学

1965年 京都府生まれ
1995年 上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学
1998年 ロンドン大学大学院MPhil課程修了
1999年 東京理科大学専任講師
2009年 ドイツ・ミュンスター大学客員研究員
2017年から現職
博士（文学）（上智大学）

主な著書・論文

Semantic Borrowing of Wyrð with Special Reference to King Alfred's Boethius: A Reconsideration from an Etymological Point of View. (Nodus Publikationen, 2004)
『英語の語源探訪—ことばと民族の歴史を訪ねて』（大修館書店、2011）
『「人間らしさ」の言語学』（開拓社、2016）
『インタープレタティオ・ヤポニカーアングロ・サクソン人の改宗と詩一』（明治大学出版会、2021）

所属学会

日本中世英語英文学会、サウンディングス英語英米文学会、イギリス国学協会